

ハーヴァード留学便り

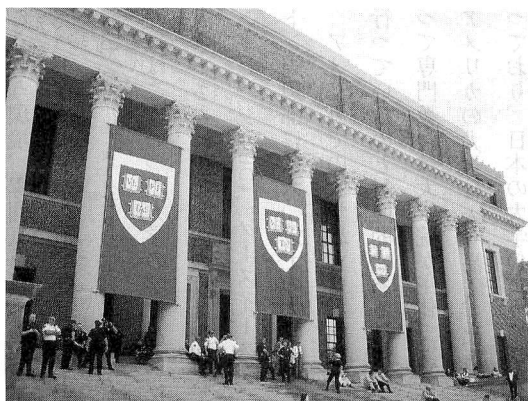
山 本 和 彦

二〇〇七年四月から一年間の予定で、米国マサチューセッツ州ケンブリッジ市にあるハーヴァード大学 (Harvard University) に、二〇〇七年度大谷大学在外研究により留学している。所属と身分は、サンスクリット・インド学科 (Department of Sanskrit and Indian Studies) の客員研究員 (Associate) である。ヴィザは「J-1 (交流研究者)」というカテゴリーである。指導教員は、パリマル・パティル (Parimal G. Patil) 先生である。彼はサンスクリット・インド学、宗教学 (Department of the Study of Religion)、神学 (Divinity School) という二つの学科・スクールにまたがって大学院の学生の論文指導をしている。彼の経歴、学部 (ペンシルヴァニア大学) で哲学、修士課程 (ハーヴァード大学) でサンスクリット、博士課程 (シカゴ大学) で宗教学という異なる分野で学位を取得していることが指導力の広さにつながっているであろう。私は、バーカー・センター (Barker Center) という宗教学科の入っている建物の4階にある個人研究室 (四〇五号室) を使わせてもらっている。

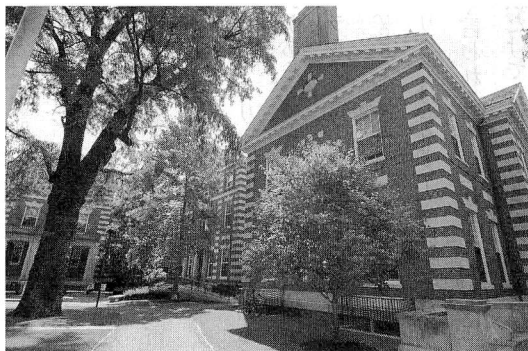
このバーカー・センターは、ハーヴァードのメインキャンパスの東側にあるクインシー・ストリート (Quincy Street) に面しており、ファカルティー・クラブ (Faculty Club) という教員専用のレストランの向かいにあり、とても雰囲気が良い。またサンスクリット文献を所蔵しているワイドナー図書館 (Widener Library) にも近く、便利な場所にある。図書館の開館時間は、午前九時から午後一〇時までで、土日も開館しており、ほぼ年中利用できる。ハー

ヴァードには図書館は全部で九〇ほどある。蔵書数は一、五三〇万冊で世界でも有数のコレクションである。サンスクリット関係では、ない本がない程充実している。まさに伝統である。図書館にない本はリクエストすれば、そのコピーが手に入る仕組みになっている。大学の命である図書館は、大学図書館として蔵書数、利用システムなど世界一であることを実感させられる。

ハーヴァード大学は一六三六年創立であり、大谷大学より三〇年ほど先輩である。始まりは神学校であった。現在、学部生は六、六五〇人、大学院生は二、三、〇〇〇人、教員は二、三〇〇人だが終身雇用の教授は八七〇人である。教員は全員専任であるが、任期付きの教員の方が多い。学部の新入生は全員寮生活である。このときの間人間関係が社会に



ワイドナー図書館



バーカー・センター

出てから役に立つのだろうと想像できる。3年生からは寮を出なければならぬので、学生たちはハーヴァード周辺のアパートで暮らしている。彼らのおかげで、ハーヴァード・スクエアはとても活気があり、楽しい雰囲気がある。各国料理のレストランがたくさんあり、ボストン市内に比べて値段も安く、気軽に入れる。インド料理屋の向かいにタイ料理の店があり、その隣にベトナム料理屋があったりする。国際的には

こういう環境、雰囲気を言うのだろう。文化とは言語と食である。

ハーヴァードから地下鉄で二駅ボストン方向(西)に行けば、過去六〇人ものノーベル賞受賞者を排出しているMIT(マサチューセッツ工科大学)がある。ハーヴァードとまた雰囲気が違うが、ケンブリッジ市のアカデミックな雰囲気はこういった大学の学生たちが作っているのである。ケンブリッジ市から少し北にあるメドフォード市にタフツ大学、さらに少し北西のウォルサム市にはブランダイス大学がある。ボストン市内にはボストン大学(BU)、ボストンカレッジ(CO)、ノースイースタン大学、バークリー音楽院などがある。ボストン・メトロポリスと呼ばれるボストン周辺部には六〇以上の大学、カレッジがある。ボストンは学生の街である。

アメリカでの大学教育は、学部ではリベラルアーツ(教養、一般教育)に終始する。日本で一年生から専門教育を行っているのと対照的である。法学(Law School)や医学(Medical School)などは大学院からスタートする。したがって専門教育は大学院が主体である。アメリカでは学部と大学院とは別の大学で教育を受けるのが一般的である。アメリカの大学は入り易く、出難いとよく言われるが、それぞれ大学によってスクールカラー(校風)がかなり異なっており、日本の大学のように学力や成績だけで合格するということはない。それぞれの大学はスクールカラーに合った学生を選択しているし、学生もそうである。たとえば、アイヴィー・リーグ同士での学部と大学院の学生の行き来は盛んであるが、MITで学びたい学生はハーヴァードには出願しないであろう。アメリカでは受験は、相性チェックのようなものである。ハーヴァードでの教育は、単なる知識の伝達ではなく、人間教育の側面が強い。ハーヴァードのリベラルアーツとは人間学である。

ハーヴァードの組織は次のようになっていいる。大学(University)は一一のスクール(Business, Continuing Education, Dental, Design, Divinity, Education, Engineering, Government, Graduate School of Arts and Sciences, Law, Medical, Public Health)の一〇のカレッジ(Harvard College)の一〇のインスティテュート(Radcliffe Institute)から成り

立っている。学部教育はカレッジ (Harvard College) でおこなわれており、学部は文理学部 (Faculty of Arts and Sciences, FAS) のみである。生涯教育のスクール (Continuing Education) では、サマー・スクール (Summer School) と通常の秋学期と春学期で一般人向けに生涯教育 (Extension School) が行われている。ここは授業料さえ払えば誰でも入学でき、ハーヴァードの学生になれる。高校生もいれば、かなり高齢の人もいる。サマースクールの学生であれば、ハーヴァードのキャンパス内にある寮に住める。外国人であれば米国の学生ヴィザが発給される。日本人は観光ヴィザで三ヶ月間滞在できるが、アメリカに対して敵対的な政策をとっている国の国民に対してはヴィザが発給されないし、友好国でない場合には制限が多いのである。こういうところで政治と教育は無縁ではないことを実感させられる。

他のスクール (School) は大学院である。仏教学、インド学、サンスクリットが学べる大学院は、神学部 (Divinity School, HDS) と文理大学院 (Graduate School of Arts and Sciences, GSAS) である。GSAS のなかに、東アジア言語・文明学科 (Department of East Asian Languages and Civilizations, EALC) 宗教学科、サンスクリット・インド学科などがある。組織は複雑であるが、教員は融通が効くので、どのスクールや学科に在籍していても自分の研究に最もふさわしい専門知識を持った教員が論文指導の教員になる。仏教研究なら、神学、東アジア学、宗教学、サンスクリット・インド学のどこに入学、在籍していても可能である。教員は時間的にも質的にも非常に熱心に学生を指導している。大学院の教育に関しては、授業よりも個人研究室での論文指導の方がメインである。学生は、博士論文を提出するまでに学部を卒業してから八年はかかる。だから教員も必死で指導する。ここでは出るのも難しい。

東アジア学科 (仏教学関係の教員は Prof. Ruichi Abe など) では、日本の仏教、歴史、美術などを研究している学生がいる。宗教学科 (Prof. Diana Eck, Prof. Parimal Patil など) では、イスラム教、ヒンドゥー教を研究している学生が多い。サンスクリット・インド学科 (Prof. Leonard van der Kuijp, Prof. Michael Witzel など) では、チベット仏教を研究

している学生が多い。神学部 (Prof. Janet Gyaso, Prof. Anne Monius, Prof. Donald Swearer など) にも仏教を研究している学生がいる。

GSAS では、授業は円卓テーブルで行われている。ひとクラス一〇人から一五人ぐらいである。一回の授業は一時間である。ちなみにチャイムは鳴らない。教員はひとりずつ学生を指名して自分の意見を言わせるが、討論(ディベート)形式ではない。学生はスターバックスなどのドリンク持参で教室にやってくる。ラフな感じだが、学生はみんな集中しているので授業の質は高い。学生はよく勉強している。教員も一回ずつの授業の予習にかなりの時間と労力を費やしている。大学教員は教えるプロである。夏休みは論文作成の準備のために留学する学生が多い。ほとんどの学生は何らかの奨学金をもらっているか、働いて資金を貯めてから入学してきているので、アルバイトはしていないし、授業の予習が大変なのでそんな時間的な余裕もない。仏教学やサンスクリット関係の学生でも留学生は多い。アジアからの留学生も多いが、世界中あちこちから来ている。ここでは国籍と人種が一致しない場合が多い。アメリカ生まれ、アメリカ育ちで両親がインドからアメリカに移住してきた学生もいる。彼らの国籍はアメリカなのでアメリカ人である。彼らは英語の発音もメンタリティーもまったくアメリカンである。両親の国インドを訪問して、カルチャーショックを受けてアメリカに帰ってくるインド人(国籍はアメリカ)もいる。移民の国アメリカでは、「国際」(international)ということばをいろいろと実体験できるのである。

最後になってしまったが、ハーヴァードのサンスクリット研究の伝統について述べておく。一八七二年にその教育がスタートしている。最初にサンスクリットを教えたのは、James Bradstreet Greenough であった。当時彼はラテ語の助教教授であった。一八八〇年に、Charles Lanman がインド・イラン語学科 (Department of Indo-Iranian Languages) の教員として着任した。その後、学科の名称は一九五一年に現在の名称であるサンスクリット・インド学科 (Department of Sanskrit and Indian Studies) になった。アメリカの他アジア研究という地域研究のな

かで仏教学やインド学を学ぶのに対して、ハーヴァードではその学科名称が象徴しているように言語重視である。これは印欧語としてのサンسكريット研究というその始まりからの伝統に由来している。現在では、サンسكريット以外にパーリ、チベット、ヒンディー、ウルドゥー、タミールなどインド亜大陸の諸言語も教えている。ハーヴァードのサンسكريット研究の歴史は、ハーヴァード・オリエンタル・シリーズ (Harvard Oriental Series) というハーヴァード大学出版局 (Harvard University Press) からのシリーズ本で知ることが出来る。The Yoga System of Patanjali (James H. Woods, 1914), The Bhagavadgītā (Franklin Edgerton, 1944), Dignāga, on Perception (Masaki Hattori, 1968) などとはインド哲学の研究者であれば、誰もが論文作成時に頻繁に引用する名著である。Materials for the Study of Navyanyāya Logic (Daniel H. H. Ingalls, 1951) と Navya-nyāya Doctrine of Negation (Bimal K. Matilal, 1968) と (2冊) の2冊は、私がインド留学中 (一九八八—一九九二) に何回も繰り返し読んだ本である。この2冊の本がまさに今回の在外研究の地にハーヴァードを選んだ理由である。新論理学 (Nyāya-śāstra) の基礎知識はこの2冊の本から得た。新論理学研究の伝統のある大学は、インドを除けばハーヴァードが唯一である。長い間、私にとってハーヴァードはどうしても経験しておかねばならない故郷のような存在であった。サンسكريット・インド学科の主任教授はチベット語が専門のカエップ先生であるが、私は宗教学科のパティル先生の指導を受けることになった。彼はハーヴァードでカエップ先生の前任者であるナガトミ先生 (Prof. Masatoshi Nagatomi) の指導を受けた。そのナガトミ先生はインゴールス先生 (Prof. Ingalls) の指導を受けた。このインゴールス先生こそ前述の本 (Materials for the Study of Navyanyāya Logic) によって、新論理学をインドから世界へ紹介した人物である。インゴールス先生はまたオックスフォード大学教授であった故マティラル先生や京都大学名誉教授の服部正明先生の指導教授でもあった。現在、パティル先生がハーヴァードのサンسكريット研究の伝統と歴史を受け継いでいる。パティル先生の指導で新論理学について博士論文を作成している学生もおり、ハーヴァードの伝統は守られているのである。

ハーヴァードで学んでみて、常に感じることもある。それは伝統の力である。目には見えないが、この大学で学ぶものすべての人間が感じるものである。それは学生と教員を支えるものであり、ハーヴァードの人間すべての誇りであり、三十七年間続いているものである。